

むかし、あるところに、母親と小さい娘がいました。

あるとき、母親は、病氣になつて死んでしまいました。やがて新しい母親が来ましたが、この新しい母親は、娘を憎んで、いじめてばかりいました。そして、ある日、母親は、娘を山奥に連れていって、置き去りにしました。

娘は山の中で、帰る道が分からなくて、しくしく泣いていました。すると、山のばあさんが現れて、

「おうおう、かわいそうに。どうしてこんな所で泣いているんだ」とききました。娘が、「お母さんに連れられてここまで来ましたが、置いて行かれて、帰る道が分かりません」と答えると、山のばあさんは、

「おうおう、かわいそうに。それなら、もう、うちに帰らないで、山を下りて里へ行け。そうして、金持ちの旦那だんなさんの家で働くといい。それにしても、おまえはかわいらしい娘だから、山賊さんぞくにでもつかまったら大変だ。このばばっかわを着ていくといい」といつて、娘にばばっかわをくれました。娘が喜んでばばっかわを着ると、娘はきたないおばあさんになりました。

娘は、山を下りて行きました。とちゅうで山賊が娘を見つけました。

「おう、あそこに、女が来るぞ」

けれども、近くまで来ると、たいへん年とったおばあさんだったので、

「なんだ、きたないばあさんだなあ。早くいつてしまえ」といつて、そのまま通してくれませんでした。

娘は、里まで来ると、金持ちの旦那さんの屋敷に行きました。そして、

「どうか、火焚ひたきにでも使ってください」とたのみました。旦那さんは、すぐに娘をやとってくれました。

娘は火焚きばあさんになって、昼間はよく働いて、夜になると、自分の部屋で、ばばっかわをぬいで本を読んでいました。

あるとき、この家の息子が、夜遅く帰ってきました。そして、火焚きばあさんの部屋に明かりがともっているのを見て、

「はて、こんな遅くに何をしているんだろう」と、こっそりのぞいて見ました。すると、

美しい娘が、ひとりで本を読んでいた。

「こんなかわいらしい娘は、見たことがない」

息子は、娘のことがわすれられなくて、毎日思いつづけているうちに、とうとう病気になって寝こんでしまいました。旦那さんは心配して、あちこちのお医者^みに診てもらいましたが、いつこうによくなりませんでした。

あるとき、占^{うらな}い師に見てもらったら、

「これは、ただの病気ではない。この家の中に、息子さんの氣に入った娘がいるから、その娘と結婚させたら、病氣は治る」といいました。

屋敷には、たくさん^おの娘が働いていました。娘たちは、ひとりずつ、息子の寝ている所に行つて、

「具合^{ぐあい}はいかがですか。お湯でもお茶でもどうですか」と声をかけました。けれども、息子は、うんともすんとも答えませんでした。とうとう、声をかけていないのは、火焚きばあさんだけになってしまいました。旦那さんは、

「ばあさん、おまえも行つてみてくれ」とたのみました。火焚きばあさんは、

「いや、わしみたいなものが行つても、どうにもならん」と断りました。それでも、むりやり行かされることになりました。

火焚きばあさんは、ばばっかわをぬいで、息子の寝ている所に行きました。そして、
「具合^{ぐあい}はいかがですか。お湯でもお茶でもどうですか」と声をかけました。

息子は、にこにこして、

「ああ、お湯でもお茶でもいただきこう」といって、起き上がりました。病氣はたちまち治つてしまいました。

娘は、金持ちの旦那さんの息子と結婚して、一生幸せに暮らしたということです。

村上郁再話

資料『ろばたのトントムカシー小千谷の昔ばなし』水沢謙一／野島出版